

国際医療福祉大学審査学位論文（博士）

平成28年度大学院医療福祉学研究科博士課程

# 題目：盲養護老人ホーム入所者によるボランティア活動に関する研究 —地域での交流による変化—

保健医療学専攻・先進的ケアネットワーク開発研究分野・介護福祉学領域

学籍番号：14S3042 氏名：田代 由美

研究指導教員：竹内 孝仁 教授 副研究指導教員：小平 めぐみ 講師

キーワード：盲養護老人ホーム入所者 ボランティア 地域交流 生きがい

## 1. 研究の背景と目的

2010年に厚生労働省が算出した日本人の健康寿命は、男性70.42歳、女性73.62歳、同年の平均寿命との差が、男性で9.13年、女性で12.68年である。この平均寿命と健康寿命の差の拡大は、医療費や介護給付費用を消費する期間の増大を意味する。疾病予防と健康増進、介護予防等によりこの差を短縮することが出来れば、個人の生活の質の低下を防ぐとともに社会保障負担の軽減も期待できる。健康に過ごすこと、更に生きがいの獲得は高齢期の生活の充実に必要であることは今日では共通の理解であり、相手の役に立つことが生きがいにつながり、高齢期の適応の幅を広げ<sup>1)</sup>、高齢者の生きがいに対する積極的な支援が将来的な介護予防につながる<sup>2)</sup>とされている。また健康でかつ医療費が少ない地域には「いいコミュニティ」の存在が指摘されていることもあり、地域のつながりの強化も必要とされている。地域におけるボランティア活動は、主観的幸福感の獲得やQOLの向上、自立支援に有効であると言える。しかしながら施設入所者は、それまで持っていた家庭内や地域での役割を失い、施設職員から一方的にサービス受けるという受動的な生活スタイルとなってしまう事で、この「生きがい」を持つことが難しくなってしまう。更に盲養護老人ホーム入所者は、施設の専門性と希少性により、地域とのつながりが断たれてしまう傾向が他の施設に比べても強い。この盲養護老人ホーム入所者がマッサージというボランティア活動を通じて起きる主観的な心境の変化と活動によってもたらされる周囲の変化を明らかにすることを目的とし、施設入所後の地域交流のあり方や、生きがい作りについての示唆を得る。

## 2. 方法

本研究は3つの調査と補足データにより構成される。調査1では参与観察を行い記録した。実際のボランティア現場での活動内容と施設での活動内容を記録し、行動変容を明らかにした。調査2では、地域でのボランティア活動を通じて、盲養護老人ホーム入所者の主観的な心境の変化を明らかにするために、ボランティア活動に参加した入所者に対して、活動開始以前と開始後の2回インタビュー調査を実施し質的内容を分析した。研究者はこの研究の期間中、研究フィールドである盲養護老人ホームに施設長として勤務していたことから、インタビュー対象者以外の職員の入所者への関わりや、意見、ボランティア活動に参加している入所者への研究者自身の関わりなども、補足するデータとして活用した。

## 3. 倫理上の配慮

国際医療福祉大学倫理委員会承認を得て実施した（承認番号 14 - lg - 13）

## 4. 結果

調査 2 の盲養護老人ホーム入所者がボランティア活動を開始する前のインタビューから、59 の中心的意味、14 のサブテーマから、【入所以前の生活】【人間関係に苦勞する】【集団生活に妥協する】【施設に入所して良かった】【日常の楽しみ】【ボランティア活動参加の動機】【ボランティア活動参加への不安】【ボランティア活動への自信】【ボランティア活動への期待】【他のボランティア活動への意欲】【今後の生活への希望】の 11 のテーマが抽出された。また、活動開始後のインタビューからは、56 の中心的意味から 18 のサブテーマから、【在宅生活での限界】【集団生活の不満】【入所して良かった】【職員への不満】【イベントが楽しい】【ボランティア活動参加への意欲】【思ったようにできないジレンマ】【取り戻した自信】【ボランティア活動での喜び】【マッサージの専門性の追求】【他のボランティア活動への意欲】【今後の生活への希望】の 12 のテーマが抽出された。調査 3 の盲養護老人ホーム職員からみた変化についてのインタビューからは、62 の中心的意味、18 のサブテーマから、【活動前の集団生活になじめない様子】【活動前に顕著だった認知症状】【ボランティア活動を楽しむ】【経験からの自信】【人間関係の改善】【見た目の変化】【問題行動の改善】【新たなコミュニティの発生】【生き生きとした様子が見られることへの感謝】【活動の広がりへの期待】【今後の取り組みへの意欲】【自立支援介護の効果】【入所者の活力あふれた施設】の 13 のテーマが抽出された。

## 5. 考察

ボランティア活動を行う事によって、最初は積極的ではなかった盲養護老人ホーム入所者も、施設の外に出る事や、地域の人との交流を持てる事を楽しみと感ずるようになった。それだけではなく、マッサージという専門性の提供という活動が、かつての経験からくる自信を呼び覚まし、より大きな自己有用感の獲得につながったと考えられる。そしてこの自己有用感「生きがい」に繋がり、施設での日常生活の場においても、前向きで、進んで人と関わろうとする態度への変化となって表れている。盲養護老人ホーム職員についても、ボランティア活動に参加した入所者の生き生きとした姿を目にする事で、その他の入所者に対しても地域との交流がもたらす意欲の向上に期待し、そのための施設環境づくりを目標としたいという、自身の支援の在り方への向上心と意欲をもたらしている。

## 6. 結語

盲養護老人ホーム入所者がボランティア活動に参加することによって、自己有用感を得ることにより「生きがい」を見出し、施設での生活についても前向きな心境に変化していくことが明らかになった。また、周囲の変化として、参加していない入所者や職員の意欲にも影響し、施設全体の活性化につながることが明らかになった。施設入所がやむを得ない高齢者に対して、積極的に地域との交流の場を作っていくことが、施設の重要な役割となるものと考えられる。

## 7. 引用文献

- 1) 斎藤静. 高齢期における生きがいと適応に関する研究 - ネットワークの観点から - .  
現代社会文化研究 No.41 2008;63-75
- 2) 上原紀美子. 高齢者福祉政策における生きがい論. 久留米大学文学部紀要社会福祉学  
科編第 5 号 2005;13-25